

法悦への過程

小林賢應

- 一 前書
- 二 學より疑惑へ
- 三 疑惑より信へ
- 四 欣求より遊行三昧へ
- 五 結語

一 前書

我々の最も望む所は喜びである。此の現實にある相と言ふものは確かに苦に違ひない。我々は常にこれよりの離脱を欲し、その爲に苦痛を乗越えて進む。そして喜びの境まで何んとかして致らん事を願ふのである。併しその境には一物の暗い影を止めてはならない。徹底的の喜びと、腹からの笑ひとを欲するのである。

然しながらこれに到達するの道は決して一樣ではない。各人各様の性格と環境とによつて、頓にその道を得る者もあるだらうし、或は漸進的にそれへ進む者もあるだらう。思はぬ苦難の道を過ぎなければならぬ者もあるだらうし或は大事件に際會して豁然大悟する者もあるだらう。所で私の機根を以てしては頓にこれに達するのは不可能事かと

思はれる。私は苦難の道を辿りつゝ進まなければならない。漸進的に轉々するより方法のない私である。私は此所に流轉の相を畫いて、それへ達すべき法悦の境に到る過程を述べて見たいと思ふ。元より私は現に苦しみつゝある、迷ひつゝある。或は悟道の喜びなどと言ふものは單なる想像、夢の如き幻影かも知れない。たゞ私自身の過去を反省し、歩んで來た道を明かにし、これを延長すれば、次の様な線が畫き得ると言ふのである。現在に於ては私は確かにかゝる道を歩みつゝある事を知る。こゝにその道を踏みしめつゝ理想の境を求める事としよう。

二 學より疑惑へ

私は學ぶ、學ぶと言ふ限りは分析である。あらゆる物への批判であり、そしてこれに對する徹底的なる征服である。我々は眞理を求める、神を求める。然しながら我々はこれを唯そのまゝ受入れようとするのではない。確かに眞であるか、確かに神は實在するや否やを一應疑つて見なければならぬ。たゞ易々としてこれを受納する事は私の意欲がこれを許さない。

然るにこれは明に信への逆行である。入信への道が右を採るべきであるならば、これは左への道である。理想の彼岸に非ずして益々これより遠ざかる道である。若しも神の光が昔日の我を照して居たとすれば、それに背を向けて歩み行く哀れな姿である。そしてそれは決して我々を満足させてくれない荒涼たる山野に導いて行く道である。我々はそれが如何なる結論に到達し、その爲に如何に苦しまなければならぬかを知つて居る。それにも關らず我々は、踵を返して右の道へ進むを肯じ得ない。その結果到達する境とは一體如何なる所か、それは懷疑主義の人々が履み込ん

だ一大沼澤であるのだ。所が私は私自身かゝる所に入り行くを悲まないのみか、返つて溫き昔を、昔の世界に生き行く人々を難するのである。そしてその中に自らを沈め盡して敢て省みないのである。かくして信への歩として學の道を取つた私は、當然の歸結として懷疑論者の世界を彷徨しなければならなくなつた。こゝに於て私はその人達思想と、その趨勢を一瞥しよう。

哲學は人呼んで何故の學と言ふ。それ故如何なる哲學者も一應懷疑主義者と言ふも可である。唯この境に一身を没入してこれよりの離脱をなし得なかつた者、又はこれによつて彌々疑惑を深め、遂に自らの立場を失つた者を特にかく名くるのである。これにはソクラテス以前のギリシヤ哲學者によつてなされたる、所謂ソヒストの論、又はアリストテレス以後のピーロンの懷疑主義等の如くに、人間によつて眞理が作り出されたとか、人間に於ける眞理把握は不可能事ならんとする論である。これは信より最も遠い絶望の境である。所が我々は最もこれに對して興味を覺えるのは一體どうした事か。誠にピーロンの徒の言ふ如く、我々の知覺は全く相對的である。我々の所見は主觀によつて各々異なる。そしてその論證が甚だ不確實である。それ故我々は何も信する事は出來ぬ。何も信するに足らぬのである。そしてソヒストの徒の言ふ如く「人間は萬有の尺度である。」と言ふ語を以て、人間萬能を謳歌し、その結果この境の必然的到達點たる、自殺主義か又は享樂主義の一路を辿らなければならない。自棄的なる自殺主義と言ひ一時的なる享樂主義と言ひ、腹からの笑ひを喜び法悦の境に浸る我々の理想境と、殆んど對稱的な位置である。私は最も純粹なる道を出來るだけ眞面目に進んだ積りにも關らず、私の行きついた所は光明に輝く淨土に非ずして、寂漠奇怪極る奈落の底であつた。若し何等かの道がこゝに展開しなければ、私はこの境に自滅しなければならぬ。

三 疑惑より信へ

私は懷疑主義の最先端を走つて見た、そしてそれは失敗に終つた。私は此所で他の哲學者の懷疑の道を見る事とする。多くの人がさうするやうに、私はこれをデカルトに學ぶ。彼の一生は實に愼思にして熱烈なる求道の生涯であつた。彼が十一歳の時入學したるイエス會の學院は、當時歐羅巴に於て最も理想的なる學園であつたと言ふ。彼はこゝで八年間古典的知識に論理學に形而上學に、充分の時を過し、後ポアティエ大學に於て法律學と醫學とを修めた。その後には彼は言つて居る。「私は幼少の頃から文字の中で育てられて來た、そしてそれによつて人生の總ての事について、明晰確實な知識を得る事が出來ると言ひ聞かされて來たので、文字を學ばうとの極度の望を抱いて居た。併し全課程を終へて學者の仲間入りをしようとした時期に達するや、私の考は全く變つてしまつた。何となれば自分は多くの疑惑や誤謬に悩まされて居て、學問しようと思ふながら、唯次第に己が無知を露にしたと言ふ事の外に、何の利益も得なかつたと思はれたからである。」此所に於てデカルトは學園を離れると共に書物を棄てた。そして世間と言ふ大きな書物を繙かうとした。しかしこゝにも習慣と墮性によつてのみ動く相を發見したのである。彼は本來の自分に立還らなければならぬ。彼は世の中の最も疑ふべからざる底のものを求めようとする。そして蓋然的推論を捨て、明證の論理を追求する。その結果は數學と論理學となつて展開する。然しながらこれにも一定の假定によつて成り立つ不完全性を見た彼は、最も根本的な認識を探究せんとした。この態度は次の語によつても明である。「何等の疑をさし挟む餘地なき程に、明晰に、且つ判明に、私の精神に現前するものゝ外、何物をも私の判斷に取入れぬ事、」總ては疑はれ

否定された。「私は世には全く何もないと自らに説得した。天もなく地もなく精神もなく物體もない。従つて私自身も存在しないではないか、然し私が私自身をかく説得する時、かく思惟する私は何ものかであらねばならぬ。と氣づいた。我は思ふ。故に我あり。」これはデカルトにとつては推論の域を越えたる一の直感的命題であるのだ。神的靈感とも言ふべき獨立的自由性を持つた現前の事實であつた。こゝに至つて彼は第二の段階たる神を、又第三の段階たる外的世界を、次々に自己の判斷の中にとり入れて行つた。

私は今やデカルトによつて疑惑より信への轉換を明示された。思へば疑ふ事それ自體が信への前提であつたのだ。さうだ、疑ふ事によつてのみ信する事が可能なのである。私は漠とした信仰を好まぬ。確固たる底の信を望むのである。それ故私は先づ疑つたのである。それは確かに迂遠の道であらう。併し私が信するに足るものを求めんが爲にはかゝる法を取るより外、取るべき術がなかつたのである。私は今やその歸着點に到達した。デカルトが神の世界へ又社會肯定の世界へ進んだ如く、我々も次の世界を想像する事としよう。

四 欣求より遊行三昧へ

私は疑惑より信へ一轉した。併しこれを以て直に神の世界に導かれるとするのは早計である。それは唯理智的なる一つのヒントにすぎない。其處には其の後に來るべき行的なる、體現の世界が介在して居るのである。此所に到つて理智的なる學への努力は、情的なる宗教的努力へと移らなければならない。そしてこれは前の如き進めば進む程目的より遠ざかる姿ではない。苦難の道と言へども喜び多き苦しみである。希望の暗示されたる道である。此所に於て私

は欣求の姿としてひたむきに進む、この實踐的行こそ多種多様である。坐禪念佛又は藝術、自己の業務等、各々その性格に合致せる行の世界が展開するのである。この世界に於ては自己の行の致らざる事についての反省はなさるゝも、行についての反省は一切許されない。此所に轉換以前の學的立場と、轉換以後の行的立場との相異點が存する。そしてこの故にこそ我々は、苦難の道を喜んで進む事が出来るのである。神を求めて轉々したる私は、こゝに初めて軌道に乗る事が出来た。然らばこの軌道は一體何處に通ずるの道か。

私は行を行する時、たゞ一向にこれを行ふのであるが、この行こそ絶對なる境としてこれに執着してはならない。行は苦しい、どうして苦しいと感ずるか、それは多くの場合これに執はれてしまふからである。これに執はれるやいなや私は欣求出来なくなる。やうやく疑惑より脱したる私は、又この關門たる行によつて繫縛されてしまふのである。私の次に殘されたる道は、これよりの離脱である。換言すれば、行そのものに執はれることなき、この形式に着する事なき境地に進むにある。

行にはそこに自らなる形式がある。入信の私は一度はこの形式の中に我身を没入しなければならぬ。然し、一度疑つた私が、これよりの離脱を目標とした様に、一度形式の中に自らを律したる私は、又これよりの離脱を以てその目的としなければならぬ。そして一度この難事を行し盡した時、そこに初めて何物にも執せらるゝ事なき眞の自由人が、躍如として現はれる。この境にまで到達したる者には、最早苦しいと言ふ事を知らない。この人の心は眞に柔軟となる、怒と言ふ事を知らない。そしてこの境に居れば世事の全ては遊戲である。總てが喜びである。この人の喜びは世間的なるそれと異り、裏面に潜む暗い影を藏さない。「心の欲する所に従へども矩を踰えず。」である。何事を行ふも

往くとして可ならざるはない。私はこれを元祖上人の行狀に御伺ひして見よう。上人の傳道教化は總てこの遊行三昧であつたらうが、私はこれを特にかの有名な上人流罪の場面に拜見する。上人に流罪の宣下がありいよいよ土佐に行かれる時法蓮房等が御身を案じられて、一向專修の興行を止むべき事を申し上げた時、上人の言はれるには「流刑さうにうらみとすべからず、そのゆへは、齡すでに八旬にせまりぬ。たとひ師弟おなじみやこに住すとも、娑婆の離別ちかきにあるべし。たとひ山海をへだつとも、淨土の再會なんぞうたがはん。又いとふといへども存するは人の身なり。おしむといへども死するは人のいのちなり。なんぞかならずしもところによらんや。しかのみならず念佛の興行洛陽にして年ひさし、邊鄙におもむきて、田夫野人を進める事年來の本意なり。しかれども時いたらずして素意まだはたさず。いま事の縁によりて、年來の本意をとけん事、すこぶる朝恩とも云ふべし。」云云。この際上人は弟子等の世間的人情には深く感謝されたであらうが、一方又それを哀れまれたに違ひない。上人は遊行三昧の境に居られたのである。師弟一時の別れとは言へ上人にとつては、淨土に於ける再會は疑ふべからざる事實であつたのだ。この境に於てはこの境に、直ちに我と我身を没入して餘す事なき上人には、これも亦得難い化導の機會であつた。「これ朝恩なり、」と言はれたる上人の御心持は、この自由人を理解する時、正しく領き得る事であると思ふ。これこそ私が眞に元祖上人に學ぶべき境地である。喜び、腹からの笑ひがこの境の總てである。

五 結 語

「學はサタンかユダの如きものである、併し私にはこの惡魔の紹介なくしては神の御聲を給はる事は出來得ない。」私

はこんな事を手帳に記した事があつた。實際この矛盾に満てる道が、私には最も着實な道として受取られてくるのである。この甚じき迂遠の道より進む事の出来ない私である。此所に今一つ注意すべき事がある。それは自分がその境に到らぬ先からその境の人となつてしまふ事である。求道の途上にある我々が直ちに遊行の境を真似るなどと言ふ事は、虎を畫いて猫となるよりも甚しき滑稽事である。我々はたゞこの境に於ては、徹底的にこの境を窮め盡すより道を知らない。たゞ眞面目につき進むのである。さうすれば其處には自ら次の世界が展開する。そして次の世界に移るや決然一轉して前の世界を捨去り次の世界を究めなければならない。急いではならない、怠つてはならない、我々の望はこの法悦の境にあるのだ。